

## 私学の教育 ～教師に求められるもの～

鳥取敬愛高校 倭島 慶吾

### はじめに

私は1987年（昭和62年）3月に明治大学農学部農芸化学科を卒業し、地元鳥取県で当時唯一の女子高であった「鳥取女子高校」、現在の「鳥取敬愛高校」に理科の教員として勤務し28年になります。現在は教務主任ですが、教師生活の大部分を学級担任として過ごしてきました。自分の失敗や反省から得たものが、教師を目指す若い人達のお役に少しでもなればという思いで今回のテーマを「私学の教育～教師に求められるもの」にしました。教師に関わるそれ

それぞれの立場の人が何を求めているのか、具体的にお伝えできればと考えています。生徒たちは、人との関わりを通して「生活の充実」や「自己の成長」、「目標の達成」を実感することで自然に笑顔になります。私たち教師の仕事は生徒の笑顔を作ることなんです。笑顔を見るための仕事なんて素敵だと思いませんか。教師は「生徒の姿」「成長」「笑顔」から「仕事の必要性」や「やりがい」を感じることができる職業であり、そのことはどの学校にも共通しています。

### 生徒が求めるもの

#### ○高い授業力～授業は教師の看板～

生徒が求めるものは、まず高い授業力です。学校生活の大部分を生徒は授業に費やします。ですから、生徒たちはごくあたりまえに分かりやすい授業・楽しい授業・メリハリのある授業を求めます。分かりやすい授業ができれば、かなり力のある先生です。分かりやすい授業や楽しい授業の実践はそう簡単ではありません。なぜなら準備に相当な労力と工夫、細かいプランニングが必要となるからです。生徒の顔を思い浮かべ、期待に応えよう頑張る先生は、生徒からも同僚からも信頼される存在になります。しかし、興味関心を引き、分かりやすい授業ができればそれで良いのかというとそうではありません。授業中、生徒は受け身で、いわばお客さん状態に陥り「受け身の授業＝内容をインプットする作業」になりがちです。そうならないために「インプット～思考～アウトプットのサイクル」を意識して行います。「思考～アウトプット（＝生徒自らの発表や説明）」で注意することは「教師が答えを誘導しない」です。授業という時間的制約の中、答え知っている教師側は正解を導けるよう助け船を出してしまいます。それでは結局、やりきる力が身に付きません。また、常に正解を求める発問に偏ると生徒は間違えること（失敗）を恐れて消極的になります。つまり積極的な「アウトプット」にブレーキがかかります。発問はとても重要で教師側の工夫が不可欠となります。私自身50才になっても生徒主体の能動的な学習活動の実践はいまだに試行錯誤している状態ですが「授業力の向上は常に教師の課題」「日頃の授業が生徒の成長につながる」という意識で実践していく事が大切だと思っています。

## ○集団での公平性

「教師が生徒に公平に接する」は、当たり前のことですが、現場ではこれが意外と難しく、生徒との信頼関係を壊してしまう原因の1つにもなります。授業では、内容の理解や問題の解き方を確認する質問は日常的に行われます。私が新米の頃「生徒が答えられないのは発問が悪い。工夫が足りない。」と先輩から発問の重要性を教わりました。教師にとって生徒の「満足いく答え」や「積極的な発表」はとても嬉しいものです。教師は「自分の授業がうまくいった」「努力が報われた」という思いになります。しかし、そこに落とし穴があります。全員にむけて発問したつもりでも、授業を振り返ると、どのクラスも限られたメンバーしか発言していないことに気づきます。できる子、積極的な子、目立つ子など一部の生徒中心に授業が進んでいくのです。この傾向はHR活動でも同様です。限られた一部の生徒の考え中心にクラス全体の方向が決まり活動が進んでいくことが慢性化すると「他の人が答えるから」「自分はしなくても誰かがする」など無意識に主体性の乏しい集団になります。一部の生徒の理解度や思いだけで活動が進んでいく状況をつくることは公平な指導とは言えないのです。怖いことですが、生徒が感じる不公平感やひいきを教師側はほとんど気づいていません。教師に不公平に接しているという意識がないので無理もありません。生徒が一人でも多く参加できるように、生徒が自分で考え答えられるよう発問を工夫し、雰囲気を作り出す先生を生徒は求めます。

## ○安心感を与える個別のかかわり

学校現場ではふさぎ込んだり、明らかに普段と違う気がかりな生徒が日常的に現れます。朝のSHRや授業開始時に生徒の表情からひとり一人の状況を判断するいわゆる顔色診断は教師にとって重要なスキルです。気になる生徒がいたら時間をおかず個別に接することが大切です。その日がだめなら予定を聞き後日の約束し、忘れないよう必ずメモしておきます。面談は、唐突に職員室に呼びつける、正面向かい合わせで一方向的に質問するなど生徒が構えてしまう状況はなるべく避けます。深刻な状況だと思う時でも、外の景色やグラウンドを眺めながら、あえて世間話から始めることもあります。重要なのは、「あなたを大切に思っています」「あなたをちゃんと見ています」ということを言葉でなく行動で示すことなのです。さりげなく声をかけ、生徒に寄り添う姿勢や雰囲気づくりをする教師側の心配りは必ず生徒に伝わります。生徒の変化に気づける先生は、高いアンテナをもち日頃から積極的に生徒とコミュニケーションをとる共通点があります。その行為が安心感を与え、日々の積み重ねが信頼を築いていくのです。「忙しい」の「忙」は心を亡ぼすと書きますが、相談に来た生徒に「忙しいから」という理由でその場を離れるわけにはいきません。失敗しても努力し続けること。先生はそれが仕事です。先生は生徒にとって人生の先輩。相談できる大人として、さりげなく時間を作れる先生になってほしいと思います。

## 心得ておきたいこと

### ○自分に対し厳しさのいる職業

「先生」という言葉は敬語と捉えています。それに足りるだけの教師になるには自分に対して厳しさがあると感じています。授業力が教師の根幹に関わることは事実ですが、教師の仕事は、授業以外の業務が驚くほど多くあります。担任業務、テスト・課題作成、分掌業務、学校行事、部活動顧問、問題行動指導・保護者対応、業務のための研修や打合せなど多岐にわたる上、どの業務も生徒の成長や進路実現に直接関わり、時には人生を左右しかねない責任を伴います。多忙な中、生徒や保護者の信頼を得る仕事をやり遂げるのは大変なことです。また、生徒との距離感を意識することも必要となります。どちらが先生か生徒かわからない状況に出会うことがあります。生徒と教師の距離が近く仲のよい関係でも、言葉使いやTPOに応じた適切な態度は身に付けなければいけません。社会に出て困るのは生徒ですから、生徒のためにも「先生」という敬語に値する教師を目指してほしいと思います。

### ○心構えをしっかりと持つ～生徒は教師力を見抜く～

私が大学を卒業する頃は「ジャパンアズNo.1」といわれるほど、好景気で経済も右肩上がりのいわゆるバブル期でした。就職も大学生にとって売り手市場で、不安もありませんでした。就職前、私がもっていた高校教師のイメージは「授業が終わったら帰れる楽そうな仕事」です。教員採用試験は教養と専門教科がメインだったので「授業をこなせば教師は務まる」と安易に考え、教師としての使命感や仕事に対する覚悟をもたないまま教壇に立ちました。実際の現場は想像とまったく違っていました。大学を出たばかりの私は、生徒が家族内の問題や経済的な問題、友人とのトラブルや受験の失敗などいろいろなものを抱えて登校しているという想像力に欠け、「生徒は先生の言うことを聞くもの」「勉強は自分でなんとかするもの」「教師は生徒にさほど影響を与えない」など自分勝手な思いでいました。生徒はいい加減な教師をすぐに見抜きます。初めての受持ったクラスは43名の1年生。生徒の反発は日に日にエスカレートし生徒指導に追われ、やることなすことうまくいかない学級崩壊寸前の状況でした。1学期の慰労会の席で、クラスの一言報告をしようとしたのですが、情けなさや悔しさで涙が止まらず何も言えなかったことは今でも忘れることができません。教育者としての心構えをしっかりとらないまま担任を受け持った1年間は、教師をやめるか続けるか悩んだぎりぎりの1年でした。

### ○「若さ」は大きな武器

20代の「若い先生」の存在は15才～18才の生徒にとっても大きな影響を与えます。若いエネルギーが引力となり、最も近い存在として勉強、世間話、人生相談にいたるプライベートまで何でも相談したい、話したいと思う存在です。放課後の教室や職員室などで、若い先生の周りには生徒が集まってきます。それだけに若くても芯のしっかりした、生徒を許容できる人間性が必要となります。

### ○人としての持ち味（人間味）

生徒は一人の人としての教師にとっても興味を持ちます。教科の専門性や授業力を高めてい

くだけでは不十分といえます。キャリア教育の側面からも、教師が一人の人間としてこれまでの経験や学び、いわゆる「人生の轍」や「生き方」を生徒に伝えることが必要です。「人生の轍」は日常の習慣や些細なことから生死を分けるような大きな出来事までさまざまですが、その話に触れると生徒は目を輝かせています。今までの習慣や色々な経験はそのまま人としての持ち味になります。職場と家庭だけの往復では、生徒の生活している社会が見えてきません。趣味を活かし職場以外の人たちと余暇や娯楽を楽しむことも重要です。地域のイベントに家族と参加したり、生活エリアの人とのコミュニケーションも大切です。教師である前に、バランスのとれた社会人であることが求められます。

## 保護者が求めるもの

### ○不安の払拭

保護者が最初に教師に合うのは入学式。初日というのは生徒、保護者、先生とも不安でいっぱいです。入学式後、わが子のクラス担任がどうい先生かは保護者の大きな関心事です。近年、多くの保護者が大学卒で高学歴、教員免許を持っている方も多くいます。晩婚化による保護者の高年齢化や一人っ子の傾向はさらに増え、教育への関心も高いのです。保護者からみると、ほとんどの担任は自分より若いので期待より心配の方がむしろ大きいと言えます。第1印象はとても大切で、入学式後の最初のクラス挨拶は、明るい笑顔、てきぱき・ハツラツとした行動、丁寧な対応、冗談が言える余裕などが安心感を与える好印象となります。教員の仕事は接客サービス業の方から学ぶことがとても多く私自身は「教師はサービス業」だと思ってやっています。高校生の保護者は、わが子が新しい環境で無事に学校生活を送っているかどうか、友達とうまくやっているか、勉強についていけているのかいろいろ心配しています。クラスの様子や今週の行事、学校のトピックス、などを通信として出すなど、担任レベルでの家庭とのコミュニケーションは保護者の不安の払拭の第1歩として大切なのです。

### ○安心感を与える教育サービス

先生になったら、是非やってほしいことが2つあります。1つは「良いことがあったとき家庭に知らせる」です。先生からの連絡は、大抵、問題行動や緊急連絡だと思われています。生徒の役に立った行いや嬉しいと感じた行動を家庭に伝えるのです。

「びっくりしました、わざわざありがとうございます」「ほめられることで連絡をいただいたのは初めてです」と驚かれますが、この一本の電話が、教師と家庭に安心感を与え、生徒との信頼を築くことにつながります。もう1つは家庭訪問です。目的は生徒との関係作り・親との信頼関係作りです。私は担任を受持つと4月・5月でなるべく全員を家庭訪問します。嫌がる生徒もいるし迷惑に思われている節の家庭もありますが、できるかぎり小中学校の様子や名前の由来などプライベートな内容を聞くようにしています。学級通信などでも伝えることができますが、直接の方が、関係性が深まると感じています。

### ○わが子の成長～その気にさせる教育サービス～

生活面・学習面で学校生活に満足している生徒はほとんどいません。本当に今のままでいいのか、今の自分を変えたい、どう変わればいいのかわからない、目標が見つからないなどや、将来への不安も抱えています。生徒は何か具体的なもの、確かなものを求めています。漠然と「将来のために勉強しなさい」といっても説得力はありません。教師にはグローバルな視点で日本の状況や先を見越した進学先・就職先の情報を伝え、将来を担う人材を育てていく姿勢が求められます。面談を通して生徒の長所を共有し「こんな進路先もあるよ」とやる気スイッチを押すよう心がけます。生徒が自らを振り返って自己の成長を実感できれば成果ありです。わが子が成長すれば保護者も喜びます。進級や卒業の時、「このクラスでよかった」「この担任の先生に受け持ってもらってよかった」と言ってもらえることが目標です。日頃から生徒をその気にさせる関わりが求められます。

## 学校が求めるもの

### ○教師一人ひとりが学校の代表

どの学校であっても、先生一人ひとりに大きく期待をしています。20年程前、当時の校長が「校長になったつもりで行動しなさい」と言っていたのを思い出します。私学では基本的に転勤がないので、定年まで働くと40年近く1つの学校に勤務することになります。教師一人一人が学校を代表する存在として、また、学校を背負う存在としての自覚が求められます。また、私学では一人の教師の行動が学校の評価に直結します。教員は常に世間から見られ、評価の対象という意識をもち、良い風評につくる努力が求められます。

### ○強みを持つ

科学技術が発達していくら便利になっても教育現場では絶えず「人対人」の活動で成り立っています。まさに「教育は人なり」。先生は専門教科以外に自分なりの強みを持つことが必要だと思っています。強みを持つと、生徒は「これは～先生に聞いてみよう」となります。「進路指導」「生活」「健康」「スポーツ」「パソコンスキル」「経済」「歴史」「地域理解」「料理」etc ジャンル問いません。教科外の指導は生徒と社会をつなぎ、進路選択につながる可能性を生みます。休日になると卒業生が学校によくやってきました。大学生生活・就職・社会人生活等いろいろ話してくれます。嬉しかったこと・節目の報告・悩みや迷いを先生に話したいと来ています。卒業してからも先生は卒業生のコーチのような存在となります。人材を育てていくことは私学の先生の大きな役割です。

### ○健康であること

学校はカリキュラム（教育課程）にそって計画的に授業や行事が組み込まれ、多くの先生がいくつものクラスに係わっています。教育効果を上げるべく、時間割は網の目のパズルのように組み合わせり一人の先生がいくつもの役割を担います。突然の欠勤は、代わりの先生はいるにしても学習効果や教育成果に大きなマイナス影響となります。近年、ストレスが原因で急な欠勤や仕事上の責任を果たせない先生が増えています。精神疲労から喘息・腹痛・頭痛、腰痛や肩こり、不眠、うつ状態になるのです。健康管理の方法は人によ

っているいろいろですが、職場の悩みやストレスを自分一人で解消するのは困難です。相談できる同僚や信頼できる先輩を見つけることです。その先輩や同僚が職場のコーチ、いわば「仕事上の主治医」となります。

## 家族が求めるもの

○健康であること・家族との時間・生活人（家庭人）であること

健康であることは、学校にとって最も重要なことの一つですが、家族にとってさらに大切なことです。家族の誰かが体調を崩しただけでも家族みんなが心配になります。私も家族の入院を伴う大きな病気やけがを経験しましたが、病院の付添や宿泊、看病や病気への不安などで家中が暗い空気に包まれ生活全体に影響します。健康であることは、家族の一番の願いといえます。

また、ほとんどの人が家族との時間を大事にすることや、家庭人として家事や育児、介護など家庭生活の役割を担うことはとても大切だと思っています。その一方で、仕事を理由にそれらが実践できていない人も多くいらっしゃるのではないかと思います。私もその一人で、家事はもちろん、子どもの参観日や運動会、入学式や卒業式などわが子の節目の行事も家族に任せて行かなかったことも多くあります。家族は不満だったに違いありません。この年になって家族との時間は本当に大切だと実感しています。意識して作らなければいけなかったんだと反省しています。家族のための時間は意識的に作り出したり、休暇を取ってでも作るくらいの勇気が必要だったと振り返っています。

## キャリア教育

中高生の悩みは勉強や進学のことが多く、その原因は将来への不安が大きいといえます。その不安はどこから来るのか。国内市場の縮小や日本企業の地位低下など高度経済成長には想像できなかった今日の現状。社会の不安がそのまま生徒の不安になっているように思います。『TIMSS（国際数学・理科教育調査）2011』で日本の高校生の学力をみると、どの項目も世界上位5位以内と良い結果です。同時に実施された学習意欲に関する調査では驚くことにダントツの最下位でした。「勉強はできるけど大嫌い」「役に立つとも思わない」「勉強や授業は我慢だ」など、学校での学びや体験に対する目的意識の希薄さが顕著に見られるのです。キャリア教育は職業的自立に必要な基盤となる能力や態度を育てる職業教育だと思われがちですがそうではありません。現在の学びは発達段階が進むほど子どもたちの世界からズレていきます。つまり、高学年になって学習内容が多くなるほど、学習は社会で役に立たないという思いが大きくなっているのです。今の学びと子供たちたちをつなげるのがキャリア教育。教師の仕事は、生徒の姿・成長・笑顔から「仕事の必要性」や「やりがい」を感じるすばらしい仕事です。みなさんが先生になられたときは、今の学びを生徒たちの知っていること、体験につなげてほしいとおもいます。生徒一人ひとりの

これまでの「轍」は未来につながっていきます。このつながりこそキャリアです。

## おわりに

ご参加くださった明大生のみなさん，前向きな質疑を多く頂き，また温かいまなざしで真剣に取り組んでくださりありがとうございました。実践発表を推薦してくださった八潮市教育委員会の木村正男先生には，分科会を司会進行で活発にプロデュースしていただきとても感謝しています。なにより，私にとって貴重な経験になりました。また，準備段階から長期間お世話になりました明大資格課程事務室の広瀬清隆様をはじめ明大教育会を支えてくださる方々に心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。